
戦場を駆ける//戦国BASARA

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場を駆けるノノ戦国BASARA

【Nコード】

N2517Z

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

初BASARAです！！他の小説停滞してるのにこんなことやつてんじゃねーよとか言わないで下さい。思い立ったらすぐ行動！！が作者のモットーです。真田主従。ちなみに信玄さんお亡くなりになってます。これが最期の戦いかもしれない、ってときのお話。ぶっちゃけ作者BASARAよくわかってないからキャラ崩壊してるかもだけどそこはご愛嬌で……（笑）

「あーあ。また大層なところに喧嘩吹っかけたよねえ、武田も」

真田幸村の背後に音も無く現れた猿飛佐助は遠くで巻き起こっている戦火を眺めている。確実に劣勢。負けなのは火を見るより明らかであった。

「今戦場にちよつと加勢して状況見てきたけどさ。どー考えても勝ち目の無い戦だぜ？」

ため息混じりにそういう佐助の声は、内容とは裏腹にやや嬉々としていた。

「そんな戦は嫌か？」

自軍の危機だというのにこつもふてぶてしく笑ってみせる武田の大将・幸村は以前とはすっかり別人かと思えるほどに肝の据わった人物となっている。

いや、もともと肝は据わっていたが、落ち着きが出たと言っか、貫禄が出たと言っか。

「まさか」

幸村の問いに佐助は微笑みながらいつもの調子で答えた。

「でもさあ、大将」

壁に寄りかかって腕を組む。恐らくもう半刻もすれば敵軍はこちらへやってくるだろう。死のカウントダウンをするほど悠長ではないが、黙ってみているのも性ではない。

「嫌じゃない？　ここで死んじゃうの」

かちやりと音を立てながら鉢金を取り外した。ところどころに跳ねた血液が変色して黒くなっている。

やれやれ、返り血にも気づかなかつたか。

それを拭い終えたところで返事が帰ってきた。

「確かに俺はこの戦で死ぬかもしれない。だが今は　生きてる」
きよとんとした視線で佐助は幸村を見つめる。こちらに肩越しで

振り返っている幸村は明らかに大人びて見えた。きりつと引き締まった目元からは決意の色が覗ける。

「まだ皆を護るだけの身体があるのだ。俺はそれで充分だぞ、佐助」
「……………」

こちらを完全に振り返った時の幸村のすがすがしいほどの笑顔に、思わず佐助は鉢金を付けようとしていた動作をぴたりと止めた。丁度、時計から電池を抜き取った時のように。

「旦那……………」

つい、昔の呼び方で彼を呼びつける。

なんだ？ と首を傾げる幸村に佐助は、

「俺様嬉しいよ旦那アツ！！俺が武田^{こへ}来た時はこんなちっちゃくて鼻垂らしつ放して団子にしか興味なかったクソガキがこんな立派になるなんて」

「減給」

すぱつと言われた温度の無い言葉に、

「ごめんなさい」

話途中なのにも関わらず謝罪の言葉を言ったのだった。

「まあ、それは冗談としてさ」

鉢金の位置を微調整して幸村の隣に並ぶ。

これは負け戦。それでも逃げずに運命にぶつかろうとする大将。

俺様は影。ならば……………」

「今なら護れる命、まだまだあるぜ？」

遠くの戦火を指差して悪戯っぽく笑った。

言われなくても解っておる、と言いたげな表情をした後、幸村は思い切り空気を吸い込んだ。肩が大きく動く。

「行くぞ佐助エ！！」

二つの槍をぐつと握り締めて駆け出す幸村に遅れまいと、
「間違っても死に急ぐなよ大将オツ！！」

ほぼ同時に地面を蹴りだした。
大将の行く道なら、どこまでも。

「……け！ さすけ！！」
「……ん……？」

うつらうつらとした、まるで二日間ほど眠っていない時のような、そんな頭の重さと視界の狭さで朦朧としていたところを聞きなれた声で無理矢理呼び起こされた。

真っ赤な髪紐が視界にちらついて、嫌に意識がはつきりしてくる。
「あー……」

そしてやっと職務の最中なのだと思い出した。

「ごめん旦那！ 俺意識ぶっ飛んでたみたいで
「構わぬ！ ここから離れられるか？」

ぐつと力の籠った声を投げかけられて、やっと頭の切り替えが完了した。

そのおかげで戦中に吹っ飛んだ腕の痛みを思い出す。肩口からは止血用に縛り付けた真っ白の布が紅蓮に染め上がるほどに血液が滴っていた。

一応止血はしてたんだっけ……？ さすが俺様……。

「んー……ちよつと無理かなあ……」
変わらない口調で言う佐助の声は、明らかに切れた息の中で無理矢理絞り出したものだ確認できた。それがわからないほど幸村も馬鹿ではない。

「そうか」

幸村にも決定打は無いにしても大きな傷がいくつかはあった。それでも自分の両足でしっかりと地を捉えているところから考えるに

彼はまだ戦える。

そして彼は動けない部下をその場に安置して先に進むような部下でも、動けない部下をその場に見捨てて自分だけ逃げるような武将でもない。

「佐助！ できるだけしつかり止血をしておくのだぞ！」

「へっ？ え、大将……？」

だが自分は使い物にならないと理解した忍である佐助は、まさかここでこんな言葉をかけられるとは微塵も思っただけでなかった。忍としての任をこなせない忍は忍ではない。そうとなれば佐助自身が武田に居る意味もなくなる。捨てられて当然。

そう思っていたのに、この台詞だ。幸村なら言いかねないとも思っただけだが、状況が状況だけに、今佐助をかばうことは彼自身が死ぬ可能性も否めない。

本物の馬鹿か、この人ア……！

だからこのぴりぴりした空気の中やけに間の抜けた素っ頓狂な声が響いてしまった。

「何言ってるんだよ！ 俺はもう使い物にはならねえ！！ 大将、あんただけでも生き延びてくれ！」

「俺は……！」

覇氣のこもった声に佐助はびくっと肩を振るわせる。

「部下を見殺しにするような大将になつたつもりはない」
笑顔でそういい残して背中を向ける自身の大将。

「敵を散らしてくる！」

そう言って駆け出す姿はまさに虎で。

まったく……。

「ほんと、立派になっちゃって……」

f
i
n
.
.
.
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2517z/>

戦場を駆ける//戦国BASARA

2011年12月8日23時57分発行